

「人間のやさしさ強さ」 金沢嘉市著 童心社

「全盲達ちやんと和光」 渡辺由利編著 星林社

村石 京子

人間はやさしさと強さと両面をもった人間でありたいと日頃から思っている私としては、先ずこの本のタイトルにひかれるものがあった。そしてさらに、以前から金沢氏の講演などをうかがったりしたこと、氏の語られるものに大きな味わいを感じ、氏のもっている教育的信念を尊敬していたことなどが、この本を読みたいという動機づけであった。

金沢嘉市氏については今さら御紹介するまでもないと思うが、四十年以上小学校教育にたずさわり、子どもたちへ深い愛情を注ぎ、小学校教育に多くの情熱を注いでこられた教育者として、広く知られた方である。氏の長く積まれた教師体験と、子どもたちに対する情熱によってつくられた教育理念は、頭の中や机の上で組み立てられたものではなくて、実践の中から生まれたものであり、明日の子

どもたちを育てるための実践へとつながっていくものなのである。この実践へつながるものを求めていく金沢氏の気持があるからこそ、私たち現場人にとってもまた、明日への指針として心うたれるものがあり、心の中に残されるものが多くある所以なのである。

この本の中ではまず、現在の子どもたちの様子、そして子どもをとりまく社会環境についてふれている。現在の社会環境は、家庭、学校、社会の全てが小さい頃から成績中心の人間観をつくりあげ、勉強の振わない子どもには劣等感を植えつけている。それがもとでいろいろな問題を起こす子どもをつくり出し、片方では勉強しか出来ない子どももつくっているような現状である。金沢氏は明日の社会をつくる今日の子どもたちが豊かな人間として育っていくために、これからの教育の重要課題として次の三つをあげている。一、

自然の回復、二、人間性の回復、そして三に平和の推進という課題である。

成長期の子どもたちにとって最も大切とされるのは、自然の中で生き、自然の恵みを受けながら、優しい心情や感性を育てていくことにあると述べている。人間は自然の中で自然に育つとさえ言えるであろう。また大切なのは、子どもが子ども同士で遊ぶこと、遊び時間を多くもつことなどにある。遊びを通して子どもたちの社会性が自ら育ち、人間関係の基礎が育っていくことを思えば、遊びはいくらあっても多すぎることではないであろう。

そしてさらに、子どもを育てる役割としての大人たちが心をこめて子どもに接し、愛情をもって育てることが如何に大切かを述べている。母としての愛、父としての愛、兄弟の愛、そして教師の愛が子どもに注がれること

により、子どもは豊かな人間愛をもった人として成長していくのである。また、子どもも教師ともに学びあうためには、健常児とともに障害児を教育することが如何に大切であるかを語っている。ともに生活することによって生まれてくる友情と理解と連帯感、新しい社会のない手となる子どもたちにとって、不可欠なものといえるのではないだろうか。

最後の「子どもたちに平和を」という項では、世の中では次第に戦争の体験が遠くなり、一方では再び軍事大国へと歩みつつあるような傾向がみられている。このような現在を危惧し、教師の責任の重大さを論じるとともに、人間の尊厳を守り得るためにも、平和の教育の大切さを信念をもって述べておられる。

追いつ追われつつの点数主義の教育の中に引

き込まれていると、教育の最も根幹としなければならぬ「人間を育てる」ことが、教師自身の中でも次第に薄められていくような現状である。こんなことでよいのだろうかと教育にたずさわる者は誰しも心の中では思いながらも、現在の社会機講や教育態勢の波に押し流されているような状況である。しかし子どもによく育ててもらいたいと願うならば、先ず子どもを育てる役割をとっている私たち大人が、何が最も大切なのかを自分自身ふりかえってみたり、しっかりとしたものをも自分の中に自ら育てていかななくてはならないと思う。そんな気持をつくり出す力となる糧が、この本の中にはたくさん含まれているように感じられるのであった。

ある会でよくお目にかかる方から「一年前

に亡くなつたといふこの渡辺由利がのこした実践記録『全盲 達ちゃんと和光』がまとまつたので読んで下さい」といふお手紙とともに、この本が手元に届けられた。

和光幼稚園の共同教育の記録ということ、同じ道にある者としての期待で、本のペーじをくつた。

「共同教育」とは「共に育ち合う」ということであると書かれてある。そして和光幼稚園での障害児を受け入れていく姿勢は、次のようである。「人間を教育するということが、健全者と障害者を差別的にあつかうことがおかしいという前提にたつていた」「社会的弱者に対して温かく配慮することは、とりもなおさず人間の尊厳を教育の基本にすえることである」この教育理念に基づいて、和光では普通学級の中で教育できる可能性があると思われる障害児を受け入れていくことは、

あたり前の教育なのだったとある。

障害児を受け入れるところは、近年多くなっている様子であるが、「統合教育」という考え方で障害児教育を行なっているところがあるが、ここではそうではない。健全児のためにも、障害児のためにも「共同教育」をすることが必要なのであって、両者が共同で、学び合い、助け合いして進んでいくという考えが基本にある。

受け入れの視点は、健全児と一緒に共通になる部分を大事にしながら、障害をもつ子どもも、他の子どもたちも含めて、発達を保障しようと判断した場合に受け入れていく。「共同教育」は障害児も健全児も、人間としてわけへだてのない見方が出来、かかわりあいがもてる子どもたちを育てていくことになるとある。こうした基本的考え方と、教師のもつ深い愛情とたんねんな関わり方によつ

て、全盲の達ちゃんと級の子どもたちとの四才児学級の集団づくりは出発した。

勿論その毎日の生活の中では、教師も子どもも達ちゃん自身も、最初はとまどいや、手さぐりの部分が多くあったのが、記録の中で読みとっていくことが出来る。どんなにか大へんなことであつたらうかと思う。そして言葉では特別扱いをしないと云つたとしても、全盲児を級の中に受け入れていくことには、並々ならぬ担任教師の気遣いもあったことは察せられる。しかし初めから特別のこととはしないが、その子の障害をよく理解した上で、必要な場合は介助していくという教師の態度に影響されて、級の子どもたちも達ちゃんを全く自分たちの同じ仲間として、早くからごく自然に受け入れて対応していけるようになったのである。

こうした子どもが加わると通常は相手を助

ける、いたわる心が強くなり、子ども同士の関係もいたわり、いたわられる関係をつくり出し、障害児はそれに支えられ、健常児には人間としての優しさを育てていく上に大へん大切な機会となるというように考えられることが多い。しかしここでは全く同じ友だち関係をもって、お互いに学びあい、ともに育つという関係におかれているのである。この共同教育という精神は、お互いに人間として豊かな発達をするために大きな意味があるといえると思う。

配慮があまりに先に立ってしまったては、良い意味での緊張を伴った人間関係はつくられない。子どもたちが毎日の生活の中で、友だちとぶつかりあい、けんかをしながらも仲間として認めあって仲よくしていくのでなければ、自然な関係の仲間同士とはいえないし、「共同教育」ともいえないであろう。教育内

容や生活や、子ども同士の成長や種々の面での考察や配慮とともに、達ちゃんと仲間との生活が展開されていったのである。そして勿論その中に忘れてならないのは、担任教師の大きな愛情と努力があったからこそ、実っていったという点である。

必要に応じて援助の手を差し伸べていくこと、これは級の仲間と、担任と、そして周りの大人たちと、達ちゃん自身にとって、人間への信頼と可能性を求めていく生き方として、協力と共同の力によってすすめられてきた。このことは和光で学んだ達ちゃんばかりでなく、人間は共に育っていくという人格形成上のかげがえのない宝を周りのみんなが手にすることが出来、その喜びを教えられ、味わうことが出来たとある。これが「共同の教育」として価値のあることであろう。不幸にして渡辺由利さんは病気のため亡くなられた

が、これからも和光では実践を通しての「共同教育」は続けられることと思う。

私にもいろいろなことを教えてくれることの多い、尊い実践記録であった。読み終えて再び表紙をみると、そこに描かれている梅田俊作氏の絵は、まるで渡辺由利さんの子どもたちへの深い愛情がにじみ出てくるような感じがして美しく、いつまでも眺めてしまうのであった。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）